

これはハマーンに関する一連の物語が終わった後で、シヤアとハマーンが一連のお話について感想を言い合おうという事から始まった。二人がそれを『静寂な宇宙』終了後に楽しく話合っていた所、アムロやセイラがそれに参加したいと言い出し、急遽シヤアが日程と場所を選定した…という事からこの話は始まる。

時代は特に決めて無いので自由に想像してくれて構わないが、場所はサイド3のズムシテイーにある「喫茶KAKIZAWA」という事だけは決めてある。そこで、一人コーヒーを飲む男…シヤア・アズナブルの姿があつた。一連の物語が終わった為か、オールバックの髪型をいつものラフな髪型に戻して、カジュアルな服装で窓の外を静かに眺めていた。

バックに歌詞がない軽音楽が流れる中、これが私の物語の(事実上の)主役であるハマーンと激しい絡みを演じてきた男かと思う位、とても優しい表情をしていた。そうしていると、やがてカーリーヘアにしたハマーンが店に入ってきた。相変わらず私好みの服を着た愛しい姿をしている。

「お久しぶり。待った？」

「ああ……そうだな。十五分位かな……」

「他の人は？」

「みんな色々忙しいという設定みたいだな。遅れて来るそうだな」

「そう……じゃあ最初は私とシヤアとの話から始まる訳ね」

「そういう事だ。嫌なのか？」

「嫌な訳無いじゃないの。私が好きなのは、ずっと貴方なんだから……たぶん作者が気を利かせてくれたんだと思うわ」

ハマーンはそう言うと、店員にトマトジュースを頼んだ。やがてそれがテーブルに置かれると、一口含んだ後にこう言った。

「長らくお疲れさま……シヤア」

「ん？どうしたんだ？いきなり？」

「だって……私……というか、この作者のお陰で私と恋人関係になってしまった訳でしょ？ 本編ではアクシズでそういう関係があったかも……位しか語られて無いというのに……」

「北爪の作品では、私達は恋人同士ですら無かったしな」

「ええ、でも正直言ったら無いと思ったわ。だってあんな関係じゃ、私がZガンダムの作品内であれ程あなたに固執する理由が全く無くなってしまいわ。そうは思わない？」

その言葉にシヤアは半ば笑いながら応えた。

「ははは……確かにそうだな。自分の自由にならなくなった者を肅正したというのなら、私などは再会した瞬間お前に抹殺されてるだろうしな……」

「ふふつ、その通りね。戦場で戦うにしろ何にしろ、ニュータイプ能力は私の方が確実に上だしね」

「おいおい、余りはつきりと言ってくれなよ。確かに私はニュータイプのなり損ないの様なものだが、私が悲しむぞっ？いのか？」

「そうね。ごめんなさい。でもそんな事はお構いなしに、私はシヤアの事が好きなんだけどなあ……」

そんなハマーンを見ながら、シヤアは少し微笑みながら言った。

「そう言えば、一体私のどこに惚れたのだ？」

「え？……そうね……私の前に道を作ってくれた人だから……かな？」

「そうか？この作者の話の中では、お前を調教して弄んで、全ての責任を押し付けたあげく逃げたという最低の男になつているがな」

「それに関しては作者に代わつて謝るわね。この作者、私と貴方との関係を深くする為に、あえてそういう鬼畜な設定を盛り込みまくつて、更に主人と牝奴隷の關係にまで発展させた訳だし……」

「私は攻める側だったから良かったもの、お前はかなり辛かったんじゃないのか？露出プレイはあつたし、浣腸とか縄掛けとか苦痛だったろうに……。最後には吊りプレイまであつた訳だし……」

「そうねえ……辛かったと言えば本当に辛かったけど……シヤアとの絡みだったから……幸せだったし気持ちよかつたわ。それに、今でも思い出すと下半身が濡れてくる位よ。マズなのよね……私」

「なら、この話が終わったら久しぶりにやってみるか？」

「いいの！？嬉しい……でも、その前にこのお話が終わると思うから、読者にプレイ内容をお見せできないのがとても残念よね」

「それは仕方ないだろう。もう「物語」としては事実上終わつてるからな。私達のプライベートなプレイまで見せる義理は無いさ。もちろんこの作者にもな」

「そうね……」

微笑み合う二人。そうしていると、シヤアがまた何か思い出したように言った。

「そう言えば最後の『静寂な宇宙』の二部でセイラ：アルテイシアと合ったというのは本当なのか？」

「ええ、私とハリーを訪ねて来てという感じの展開だったわね。そう言えばその話って、本当はあの本に載らない予定だったのよね。知ってた？」

「ああ、お前が私との子供を身籠もる所で終わる結末の方が、TVの延長線上で考える二次創作物としては無難な訳だからな。そうだろう？作者さん？」

シヤアはト書きをしている私に向かって問いかけてきた。私はもちろん軽く頷いた。それを見てハマーンがこう言った。

「でも、作者は次のイベントに落ちるといふ事がある程度予想してみたみたいなのよね。だから本が売れないにも関わらず、あえてあの作品を『静寂な宇宙』に第二部として追加してみたみたい」

ハマーンの的確な読みには、私も頭を下げるしかなかった。

「それに、この作者の話ってあくまでも『私がシヤアを好き』という事を軸にして話を作ってるでしょ？そう考えると、あの第二部はその趣旨から少し外れてるのよね。私は貴方との子供と一緒に住んでる事になってるし……」

「私とセイラ……アルテイシアに関しては幼い頃に近親相姦をしていた事になってるしな……」

「そうそう。シヤアの異常な妹への想いを表現するには、確かにあそこまで飛躍した方が面白いんだけど……読者が付いていけなくなるじゃない？この作者はその辺の事を考えなかったのかしら？」

「あの本自体がもうやりたい放題だったしな。勢いで書いたんだろうな……たぶん」

「どういう事？いつもやりたい放題じゃない？この作者って」

「ああ、その通りだ。だが同じやりたい放題でもあの時は、排泄物を塗ったり食べさせたりと……今まで以上に好き勝手やっていたぞ」

「確かにそうね。今まで読者が引くのでためらうような描写も最後の小説だからって、これでもかって入れてたわね。おまけにセイラお義姉さんにも子供がいるって設定になってたし……」

「あれは私も驚いたよ。………一体誰の子供なんだか……私は知らされてないのだ。ハマーンは知ってるのか？」

その言葉に、ハマーンは含み笑いを浮かべるだけで、相手がアムロだという事を教えなかった。

「本人に聞くしか無いって事か……それもまたよかろう」

「そう言えば、その設定は空港での描写を書いている時に思い付いたって、この作者が言ってたわね。それと『ソニア』って名前は「サンダーソニア」というワンピースのキャラクターから頂いたそうよ」

「それを言うなら『ハリー』だって「ダーティーハリー」から頂いたんだろう？」

「そうね。作者の好みが判るといいうものよね……」

そう言い合いながら二人は笑い合った。まったく、登場人物達の筈なのに、本当に好き勝手な事を話してくれる。だがそれもまた楽しいとも思う私だった。そうしていると、ハマーンがぼつりと言った。

「そう言えば、この話の中でミネバ様の事には殆ど触れなかったわね」

「そうだな。たぶん作者がミネバに興味が無かったんだろうな。本来なら私とお前の間で繋がる位置にいる人物だというのは……」

「ちよつと聞いてみましょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

「ねえ、どうしてミネバ様を、お話の中に出さなかったの？」

その答えに、私は『あくまでも私が書きたかったのはハマーンの話だし、それを夢中で書いていたら出すのをいつも忘れていた』と答えた。それを、呆気にとられた様な表情で聞いているハマーン。

「……だ、そうよ。シヤア」

「なる程……商業誌に書いた訳では無いし、それはそれで良いとは思いますが……ミネバ様を登場させればもっと面白い展開が出来たかもしれないのに……」

その言葉に、ハマーンの表情がこわばり、TV版の時の声色で言い放った。

「まさか、ミネバ様を交えて3P……とか考えているのではあるまいな？シヤア？」

「ばっ……バカな事を……。他の作者ならまだ判らんが、この作者にそういう事を期待しても無理だろう。そうは思わんのか？」

「確かに……この作者はそういうプレイよりも、私をMにしての羞恥プレイとかが大好きだから……」

「だろう？なら、ミネバ様が寝てる隣で私とお前が激しく愛し合うとか、お前が縄掛けした上で服を着てミネバの相手をするとか……色々と考えられるだろうが……」

「シヤア……今更だが、お前は本当に変態だと思っようよ」

「それは……この作者の方に言ってくれ。私を……ん性格にまでしたのは作者なのだからな。でもお前はこんな私を好きでいてくれる……本当に嬉しい事だよ」

その言葉に、この作品に登場する時のハマーンの声に戻って彼女は答えた。

「私も……この作者のお陰でシヤアと色々出来た訳だし……それが例え変態行為であっても後悔する事なんて

無かったわね。だって、他の商業誌なり同人誌なりで、私とシヤアをこんなに長い間カップルとして描いてくれる人がいて？」

「いないだろうな……。短期間ならこの作者よりも熱烈なファンになった者はいたが、みんな塩が引くように熱から冷めて別なジャンルへと移ってしまったからな」

「それも時代の流れという事かしらね……」

「仕方が無いだろう。美味しい料理であつても毎日食べ続けていれば飽きる訳だし……」

「じゃあこの作者は？なぜ私達に飽きが来ないで続けられてるの？」

「それは……作者にとって私達が『ご飯』であり『水』であり『空気』だからなんだろうな」

「どういう事？」

「飽きが来るといふ次元のモノでは無いという事だよ。それが当たり前前の事なら、飽きるといふ行為自体があり得ない事だからな」

「……そこまで私達を昇華してるといふのも……ある種尊敬に値するわね……」

『アホ』という次元でな……もちろん最大の褒め言葉だといふ事を、この作者には判つて貰えてるかな？」

私は、当然という仕草をした。そうしていると、店に誰か来たような音が聞こえた。

「誰か来たようだな」

「そうみたいね……」

シヤアとハマーンが期待して入り口の方を見つめていると、アムロとセイラが一緒に入つて来るのが見えた。

「遅れてしまつてゴメン」

アムロが、濟まなさそうな表情で言った。そしてハマーンの方に歩み寄り、そっと手を差し出した。

「ハマーン……いや、僕にとってはアルテイシアだね。君に出会えた事は、僕の人生の中でとても有意義な時間だったよ。ありがとう」

「そんな事……私の方こそ満ち足りた時間を作って下さって感謝してるわ。実を言うと、TV版で会えなかった事……ずっと気にしていたんだもの……」

「君が活躍したガンダムZZで、僕は全く出番が無かったしね」

「本当よね。私……アムロと戦えるかと思ってずっと楽しみにしてたのに……」

それを聞いて、シヤアが少し面白くないような表情をしながら言った。

「ハマーン。アムロに少し心を許し過ぎてないか？」

「え？それはヤキモチかしら？シヤア？」

「バカな事を……彼は一応我々の敵になるんだぞ」

「そうは言っても……連邦軍の英雄さんだし、それなりに敬意を払わないとね。それに私は強い人が好きなのよ。知らなかった？ふふっ」

「ハマーン！」

「冗談よ。シヤア。私と貴方の関係は永遠だって……この話の作者さんがもう決めてるんだから……安心して……」

「そうは言ってもだな……」

そう呟くシヤアの肩を、セイラがそっと触った。

「兄さん。そんなにハマーンを責めてはダメよ」

「これは私とハマーンの問題だ。お前には関係無い事だ」

「あら？そうかしら？なら言わせて貰うけど、兄さんは私の純潔を奪った男なのだから、私にも言う権利があつても良くてよ」

その言葉に、アムロは驚きながらセイラを訪ねた。

「セイラさん……それって……」

「ええ、と言つても子供の頃の話なんだけどね……。私がアムロにした様々な変態行為つて、実は全て兄に仕込まれたものなのよね……」

「……」

目を丸くしているアムロに、シヤアが立ち上がつて近付いてきた。

「アムロ……貴様というヤツは……ハマーンだけではなく、アルテイシアとも肉体関係があつたというのか！」

「それはこっちのセリフだ！セイラさんと寝たという話は今初めて聞いたぞ！ハマーンと関係を持ったのは確かに済まないと思うが、実の妹にまで手を出すなんて……貴様は本当の変態なんだな！」

「貴様に言われたくない！」

いがみ合う二人の間に、セイラが割つて入った。

「はい！二人ともそこまで！今は二人が争う時では無くてよ。それに、アムロがハマーンと関係したのはともかくとして、私とアムロ、それに兄さんが私と関係したのは、その方が人間関係が複雑になつて面白いという作者の意図……いえ、思い付きによつて急遽決まったんだから」

その言葉に、シヤアは渋々と席に戻った。

「まったく、そのお陰で私は本当にどうしようも無い屑男になってしまった訳だ……」

そう言うシヤアの隣りに座ったアムロは、ウエイトレスに何やら注文をした後、そっと呟いた。

「でもシヤアの場合は、アルテイシ……いや、ハマーンの恋人として結構美味しい展開もあった訳だし、まんざらでも無かつたんじゃないのか？」

「それに関しては否定はせんよ。なあ？ハマーン？」

その言葉に、ハマーンは満面の笑みを浮かべながら応えた。

「はい。シヤアとの子供にも恵まれたし、幸せの頂点にいる感じよ」

場の雰囲気が一瞬にして和んだ。やがてアムロがおもむろにこう言った。

「僕と会った時の君は、生きていくのが本当に辛そうだったから……どうにか助けてあげたいとずっと思ってたんだけど……どうやら取り越し苦労だったみたいだね」

「ふふつ、ありがとう。アムロ……あ、そう言えば……」

「ん？」

「もし私に貴方との間の子供が出来たら……という約束……覚えてる？」

「ああ、覚えてるさ。結果的にそういう事にはならなかったけど、もし出来たら本当に君と一緒に暮らしても良いと思ってたんだよ」

「そう……それはとっても嬉しい事なんだけど……言う相手が違うんじゃない？アムロ？」

「どういう事だい？」

「ハマーン！それ以上は……」

二人の間に、顔を真っ赤にして割って入るセイラ。

「もう言った方が良いわよ。お義姉さん。こんな機会なんてもう無いだろうし……」

「え？そう……ね」

そう言うと、セイラはアムロの方を向いた。表情が少し焦っている様にも見える。

「アムロ……あのね……今度会って欲しい人がいるんだけど……いい？」

「あ……ああ、それは構わないですけど……誰なんですか？」

「それは……」

「？」

「私の……子供……なの……よね」

「へえ、セイラさん……母親になってたんだ。おめでとうございます。で、父親というのはどんな人なんですか？」

場の空気を読めないアムロが、笑顔で言い放った。それを見てセイラは顔を赤らめて下にしながら、そっと指をアムロに向けた。最初は何の事か判らなかつたアムロだったが、ハマーンとシヤアの表情をみてやっと悟る事が出来た。

「もしか……して……僕？……ですか？」

「え……ええ……」

「僕が……セイラさんとの間に……子供……」

「驚いた？」

「少し……でもコンドームも付けずに何度もしてましたから、そうなたたとしても不思議じゃ無かったし……」

「ベルトーチカとの間にも子供が出来たんでしょ？そんな時期にこんな事言うのも悪いと思ったんだけど……ゴメンなさいね」

「そんな事無いですよ。もちろん認知を含めて父親としての責任は果たさせて頂きますが……でも、何故今まで黙っていたのですか？」

「私の我が儘……だったのかもね……どうしても言い出せなくて……」

「すみません……」

「アムロが謝る事では無くてよ。それに、妊娠に気付いたのはホワイトベースを降りた後だったし……。私という女なんかに縛られてちや、私が好きなアムロの姿が壊れてしまうような感じがして……ずるずると今まで来てしまった……という事だから……」

「でも……」

「それに、私は別にアムロ……貴方に私と一緒にいて欲しいとか、養育費を出して欲しいとか、そんな事を言いたいんじゃないの。ただ、貴方との子供を私が産んだ……それを認めて欲しいだけだし、娘……ソニアって言うんだけど……あの子に一度だけでもいいから会って欲しいの。それだけなのよ」

「それだけって……」

「今の貴方には今の貴方の生活がある訳だし、それを壊したくないの……判って……アムロ。これは私からの命令よ。いっしょ？」

「………はい。セイラさんがそう言うのなら……」

見つめ合うアムロとセイラを、ハマーンは羨ましそうな表情で眺めていた。そしてポツリと呟いた。

「シヤア、セイラお義姉さんとアムロの間に子供がいるという事は、アムロは貴方の義弟になる訳だけど……どんな気持ちかしら？」

「そ……そうだな……。正直心の整理が付いてないのだが……。アムロが私の義弟か……。それもまた面白い話ではあるな……。これがきつかけで、私の同志になって欲しいものだが……」

シヤアの言葉に、アムロは複雑な表情を浮かべながら応えた。

「シヤア、それは無理だろう。僕は君が好意を寄せていた3人の女性全てと精神的または肉体的に深い関係を持つてしまった訳だし……」

「私はそんなに心が狭い人間では無いぞ……」

「そうかな？まあ、ここでこんな話はやめよう。今日はこの作者の物語が終わった打ち上げな訳だし、そちらの事を話した方がいいんじゃないか？」

「そうだな……」

シヤアがコーヒーを口に含んだ。その時セイラがハマーンに訪ねるように言った。

「ハマーン。TVの影響だとは思うんだけど、貴方のファンって、貴方の事を女王様とか強い女だとか、そう思ってる人が多いけど……それについてはどう思ってるの？」

「どう思ってるのって……それはTV版の設定の私として？それとも、この作者の描く私として？」

「もちろん、この作者の『ハマーン・カーン』としてよ」

「うーん。そうねえ……そう思われても仕方無いとは思ってるわ。だってZにしろZZにしろ、人間を描いてるよう

で裏の設定がペラペラでしょ？私が何であんな性格でシヤアに執着しまくっているのかという理由がよく判らないのよね」

「確かにね……。貴方、あの話でテイターズには冷酷だけど、シヤアがいるエウーゴとは約束を守ったりと律儀だったものね。『私はそれ程傲慢ではない』とか言ってみたり、何度もシヤアを説得しようとしたりして…貴方ってホント健気だったものね」

「そう言われると何だか恥ずかしいな…。でも世間では『裏切ったシヤアを見返してやりたい』だけの跳ねっ返り娘みたいに思われてるみたいだし……」

「公式の方で色々と後付け設定を加えたり、私達の神様が貴方とシヤアとの肉体関係を否定してるような発言もしてるわね」

「ええ……。でもそれはそれで別に……。人それぞれ色々な考え方があるし……」

「この作者も、『語られない設定』を補完する感じで活動してきたのに、最近の商業誌はそんなささやかな楽しみさえも奪うような風潮だものね」

「ええ、もう『自分であれこれ考えて楽しむモノ』から『何でも与えて貰ってその中だけで楽しむモノ』に受け手の考えが変わってしまったんでしょよね……」

「それも時代の流れという事なのかしら……？」

「……」

無言でハマーンはそつと窓の外を見た。すると遠くに大柄な男性が歩いて来るのが見えた。その瞬間、ハマーンの様子がパツと明るくなった。

「ドズル様！ドズル様だわ！……本当に来て下さったんだ……」

その表情を見て、アムロはシヤアに問いかけた。

『ドズル様』って……誰だ？」

「その……ジオン公国軍宇宙攻撃軍司令、ドズル・ザビ中将の事だ。話の中では死んでいるのだが、この話自体がそういう流れとは関係ない場所で打ち上げという内容だからな。ここに来て不思議では無いのだが……まずいな……」

「まずいつて……どういう事だ？シヤア？」

「私がガルマやキシリア様を殺してしまった事を言われるかもしれん……そう思うと……腕の震えが止まらないのだ」

「とは言え……今はお前の方が立場的には上になるんじゃないのか？今は総帥なんだろう？」

「そう言ってもだな、士官である私にとって、敵であるザビ家とは言っても、ドズル様は絶対的なものなのだ。それはこの作者が書いた『運命の出会い』でも語られてるし、『静寂な宇宙』が語られた後の世界でも同じ事だ」

「そんなものなのか？シヤア」

「ああ、それに……ハマーンとセイラのあの表情を見てみるがいい」

アムロはそう言われて二人を見ると、まるで女子高生が好きな人に告白するような表情で語り合っていた。

「どういう事だ？シヤア？二人のあんな表情は初めて見るよ。……ドズルという人はそんなに人気者なのか？」

「顔は怖いかな……まあ、会えば判るさ……」

そう言いながらコーヒーを飲むシヤアの肩を、ポンと軽く叩く人間がいた。もちろんドズル中将である。

「相変わらず元気そうだな。シヤア・アズナブル」

その言葉に、コーヒーを吹き出しながらも、スツクと立ち上がり、敬礼をするシヤア。

「ド……ドズル様もお元気そうで……」

「お世辞はいい。で、私の席は……」

「はい！今直ぐに用意します！」

素早く答えたシヤアは、隣のテーブルを繋げて場所を広くした。人数によってレイアウトを自在に出来るのが『喫茶KAKIZAWA』の良い所なのだ。ドズルは席に着き、一息付いた後にシヤアに向かっておもむろに話しかけた。

「私が話の中からいなくなつてから、ずいぶんと出世したみたいだな？シヤア」

「はい！今はネオ・ジオンの総帥なんぞをやっております」

「ほう。お前がネオ・ジオンの総帥だとはな……ああ……ガルマがあの話で生きていたら……」

そう言い放つドズルの脇で、シヤアはコーヒーカップをガタガタと揺らしていた。

「どうした？シヤア？気分でも悪いのか？」

「な……何でもありません。ドズル様……少し冷房が効きすぎているのでは無いでしょうか？」

「そうか？……ならいいのだが……。それはそうと、私に何か隠し事しているのではないか？」

「そ……そんな事は……」

「ふん。私が何も知らないと思っているのか？シヤア」

その瞬間、シヤアは素早く床に座ったかと思うと、ドズルに土下座をした。

「ん？どうした？シヤア？」

「そ…それはドズル様が一番知っておられるかと……」

「そうか……まあ、少し悪戯が過ぎたかな。お前も我々ザビ家に色々と思う事があつただろうが、それはあくまでも話の中での事だ。お前が今でも私の事を上司だと思つて接してくれる事、それにミネバを大切に扱ってくれた事……とても嬉しく思うぞ」

「はつ、ありがたきお言葉です」

「席に着いて楽にせい」

「はい、では……」

ドズルの言葉で自分の席に戻つたシヤアだったが、やはりどこか居心地が悪いらしい。そんなシヤアを後目に、セイラが頬を赤らめながら言った。

「ドズル様。私が誰だかお判りになりますか？」

「その瞳と髪型……ア……アルテイシアちゃんか？」

「はい。アルテイシア・ダイクンです。お久しぶりです。ドズル様」

「そうか、そうかそうか。あのアルテイシアちゃんか。美人になつたものだな」

「ありがとうございます。ドズル様。最初に私とお会ひした時の事……覚えてますか？」

「ああ、忘れませんよ。『兄さんをいじめる怪物！』と言つて私に向かつて来たのだからな」

「今でも思い出す度に顔が真っ赤になります。でも、今でも私の頭を撫でてくれた感触は忘れられませんわ」

「まあ、こんな顔をしてるからな……怖がられるのは仕方が無いし……慣れてるからな……はははっ！」

そう言うと、ドズルはハマーンの方を向いて話を続けた。

「で、こちらの可愛い娘さんは……んく……」

ハマーンは悩んでいるドズルの脇に座ると、そっとドズルの頬に口付けをした。急な事に驚くドズル。

「どうしたのだ。急に……」

「司令室で私がドズル様にキスをした事……お忘れですか？」

「司令室……司令室でキス……ハマーン……ハマーンちゃんなのか？」

「はい。ハマーンです。またお会いする事が出来てとても光栄ですわ……」

そう言うとハマーンはドズルに抱き付くのだった。それを見てアムロがシャアに問いかけた。

「なあ……あれはどういう事なんだ？」

「ああ……世間での認識では『ハマーンは美形好きの面食い女』という事になっているのだが、ここの作者の趣味でドズル様の事を熱愛しておられるのだ。まあ、男は顔では無いという事だよ。アムロ」

「熱愛つて……悔しく無いのか？」

「悔しくないと言えば嘘になるが、あの方に負けるのなら仕方が無いさ。私はいつまで経ってもあのお方の部下みたいなものだからな」

「そういう事か……」

そんな二人をよそに、ハマーンはドズルと昔話に花を咲かせていた。

「そう言えば、ハマーンちゃんは子供の頃、私を怖く無かったのかい？」

「全然……だって優しい心の波長が伝わってきましたし、部下の方々にとっても慕われてましたから……」

「私は私の立場で出来る事をしたままでだ。だがそれが……良かったのだろうか」

「はい。私も出来る事でしたら、ドズル様やラル様と共に戦いたかったです……」

「ふふっ、今更だが嬉しい事を言ってくれます……で、今は二人とも幸せなのか？」

「はい。私はシヤアとの子供を産む事が出来ましたし……立場上一緒にいる事は出来ないのですが、幸せですよ」

「そうか……それは良かった……」

「それとセイラお義姉さんは、そこにいるアムロの子供を産んで、やはりのんびりと幸せに暮らしてるそうです」

「アムロ……？初めて聞く名だな。ジオン兵では無いのか？」

「ええ、連邦のガンダムのパイロットだった人です」

その瞬間、ドズルの表情が一瞬険しくなった。

「ガンダム……あのガンダムのパイロットだと言うのか……」

「はい」

そうハマーンが言った直後、アムロはスッと立ち上がり、ドズルに向かって軽く頭を下げた。ドズルは無言で立ち上がり、アムロの前に歩み寄ると彼をジロジロと見回した。その光景に、ハマーンが慌てるように言い放った。

「ドズル様。落ち着いて下さい。アムロは、ドズル様が亡くなり、シヤアが私の元を去っていった後、私の心を癒してくれた恩人なんです！彼はジオン出身と言った私にさえとても優しく接して下さいました。どうか……どうかお気を沈めて下さいませ！」

ハマーンの必死な表情に、ドズルは優しく頭を撫でてそっと答えた。

「安心しろ。ここは戦場では無いからな。私とて事を荒立てるつもりは無いよ。ましてや私が大好きなハマーンちゃ

んの恩人とあらば尚更の事だ」

そう言うと、アムロの方を向き直してこう言うのだった。

「アムロ……だったな。ランバ・ラルと戦ったのはお前なのか？」

「はい……そうです」

「ん。そうか……。彼は強かったか？」

「はい。とても強くて立派な軍人でした。私は敵として出会いましたが、あの方に戦いのイロハを教えて頂いたようなものです」

「では、ソロモンの戦いは覚えているか？」

「ソロモン……連邦で言うコンペイ島の事ですね。ええ、覚えてますとも」

「では、そこで私はお前と戦って負けたのだが……それがお前とはな……」

「戦った……？」

「ソロモンが落ちる前に、私はビッグザムで出撃したのだ」

「ビッグザム？……もしかしてあの巨大な……」

「思い出してくれたか。あれが量産化していれば、事態はもう少し違っていたものを……」

ドズルは、物思いにふけながら独り言のように言った。

「……もしかして、最後にノーマルスーツで僕にマシンガンを撃ったのは……」

「それが私だ」

「そうだったのですか……」

アムロはそう言うのと深々と頭を下げた。それを見てドズルが少し驚きながら言った。

「ど、どうしたのだ急に……」

「いえ、僕はあの戦い、そしてその後のア・バオアクーでの戦いでも沢山のジオン兵をこの手で殺しました。僕も戦争は人殺しだという事は理解してますし、そこで生き残る為には殺さなければならぬ事も理解しています。でも戦いが終わった時には、味方であれ敵であれ亡くなった人達の魂を追悼するのは、生き残った者の務めだと僕は思っているので……」

アムロの言葉に、目を丸くしていたドズルだったが、やがて店内に響き渡る位の笑い声を発したかと思うと、アムロの両肩をポンと軽く叩いた。

「連邦にもこれ程立派な男がいたとはな。気に入ったぞ！ハマーンちゃんが好きになったというのも無理は無かるうて。ははははっ！」

「は……はい。ありがとうございます」

「ん。亡くなった人の事を想うのは立派な心がけだが、戦場での事は気にするな。それが戦争というものであり、それを行うのが軍人の役目だからな。だがお前に負けたのなら、私はもう何も悔やむ事は無い。後はこれから生き残った者達が歴史を作ればいいからな。この作者のお陰で時間を超越してお前達に会う事が出来たが、本当に楽しい時間だったよ」

そう言うのと、ドズルはスツと席を立てて話を続けた。

「悪いが私はそろそろ行かねばならん。これからゼナとマレーネの三人で食事会があるのでな」

「え？お姉様ったら……ここへ来てくれれば良かったのに……」

ハマーンが残念そうに呟いた。

「気を利かせてくれたのだよ。それに今頃はゼナと仲良く買い物でもしてる事だろうて」

ドズルはそう言うと、一人一人に固く握手をした後、最後のハマーンには握手の後に軽く抱き締めてそっと耳元でこう囁くのだった。

「本当にいい女になったものだな」

「はい。ドズル様から頂いたバラは、今でも大切にしていますし、バラを私のシンボルにしています。今でも私のドズル様への想いは変わりません。何でしたら、私を二人目の妾にしてくださいますか？」

「ふふ……そうだな。お前がシヤアに振られでもしたら考えてもいいぞ」

「はい。その時は是非お願い致しますね。ドズル様」

ハマーンはドズルの頬にそっとキスをした。もちろん、お互いがお互いの立場を判って言っている事である。

「私は本当に幸せ者だ……。では、元気だな……」

そう言いながら、軽く手を振ってドズルはその場を後にした。やがて、セイラがアムロに向かってこう言った。

「じゃ、私もそろそろおいとまするわね。アムロ、少し位は時間あるかしら？」

「僕？大丈夫ですよ」

「そう、じゃ、急なんだけどこれから私の娘に会って貰おうかしら。色々積もる話もある事だし……」

セイラの言葉に、シヤアは少し寂しそうな表情で言った。

「アルテイシア……元気だな」

「兄さんこそ。この作者はこれで小説を封印するそうなので、もう会う事も無さそうなんだけど……また合う

事があつたら……」

「そうだな……」

「ハマーンも元気だね。ハリーによくって言うておいてね」

「ええ。お元気で……お義姉さん……」

ハマーンはそう言った後、帰り支度をしているアムロに向かって言った。

「アムロ……私……シヤアがいなかったら……たぶんアムロの事がもつと好きになつてたと思う」

「ふふつ。ありがとう。僕は前も言ったけど、そんなに立派な男じゃないよ。それに付き合ったら幻滅してたと思うから……これで良かったんだよ」

「それでも、私の心を癒してくれた日の事は一生忘れないわね」

ハマーンはそう言うと、アムロに抱き付き、そつと唇を重ねた。やがてどちらからともなく離れ、沈黙の時間が過ぎていった。ハマーンが頬を赤らめながら上目使いにこう言うのだった。

「お元気で……アムロ……」

「君こそお元気で……ハマーン……いや、僕だけの……アルテイシア……」

アムロはシヤアの方を向いて続けて言った。

「シヤア、お前のハマーンの唇を奪ってしまったって、すまん」

「仕方ない事さ。私に甲斐性が無いという事だから……なあに、これからもつといい男になつてみせるよ」

「ハマーンを悲しい目に遭わせたなら、僕が許さないから……肝に銘じておけよ」

「ああ、他ではどうか判らないが、この作者の下でなら、まず安心だろう？」

「ふふふつ、判った。じゃあ今日のお金はここに置いてくから……」

アムロはそう言うと、セイラの方に手をかけながら、仲良くその場を後にした。ハマーンは、窓の外に見えるアムロとセイラを、その姿が見えなくなるまで見つめていた。

「アムロが気になるのか？」

「シャアが、おもむろに言った。ハマーンは、シャアの気持ちを察すると、嬉しそうに答えた。

「ううん。違うの。もう……この作者の作る話の中で会う事は無いんだなあ……と思うと少し寂しくなつて……」

「それは……私達にも言える事だがな……」

「ええ。でも私達の場合は、まだ作者の気が変わる可能性があるけど……でもこの先どうなるかなんて判らないわよねえ……」

「そういう事だ。どうする？ここでこの話を終わりにするか？それともまだ続けるか？」

「そんな決定権が貴方にあるの？シャア？」

「私はお前と違って傲慢な男だからな」

「そうよねえ……。自分が気に入らない事からはすぐ逃げたがるし、コロコロ考え方は変わるし、鬼畜だし……」

「でも、そんな私が……好きなんだろう？」

「ええ、もちろんよ。だって、貴方を幸せに出来るのは私だけなんだもの。でも本当の事を言えば、ナナイの場所に私が立ちたかったわね……」

ハマーンの寂しそうな表情を見て、シャアが優しく言った。

「この作者が言うには『背徳な戯れ』でナナイを登場させてしまった手前、『逆襲のシヤア』の設定に従わなければならなかったそうさ」

「その割には、アムロの事に関しては『ベルトーチカチルドレン』の設定なのよね」

「私達を恋人同士にはしても「めでたしめでたし」にはしたく無いのだろうか」

「どうして？」

「考えてもみる。この作者はお前に惚れて……出来はともかくずっと作品を創ってきた訳だろうか？ 本当ならばお前だけを描きたい筈だ。だがお前の幸せを考えると、どうしても私を無視出来ない訳だからな。私を登場させているのはそういう理由なのさ」

「そうなのかしら？」

「嘘だと思ふなら聞いてみるがいい」

「判った。作者さん。シヤアの言ってる事は本当なの？」

ハマーンは私の方を向きながら、半ば真剣に聞いてきた。これで、質問から逃げるようならば私は長年彼女のファンをやる資格が無い訳で、『その通り。最後に一緒に出来なくてゴメンね』と答えた。ハマーンはそれを聞くと、仕方ないという表情を浮かべながらシヤアに言った。

「私もこの作者には、コスプレや、シヤアとのマンガや、小説等色々な事を主役としてさせて貰ったのでとっても感謝してるわ。そう考えるとこれ以上の事を求めるといいうのも何だか可哀想な話よね……実際……」

「そういう事だ。丸22年もお前の事を想って活動してきたんだ。それも正当なファンからは見向きもされない様な内容である事を覚悟でな……」

「この作者の本を見た人が『こんなのハマーンじゃない』と言った事もあったわ……。ホント、読み手の人って勝手よね。思わず』じゃあ、私の幸せはどうなるのよ!?』って言い返したくなったもの」

「まあ、そういう苦勞を思えば最後の最後にああいう終わり方にしたとしても、許してあげようという気にもなる……そうは思わないか？ハマーン？」

「そうよね……今まで色々とうね。この……作者さん」

ハマーンはそう言うと、私の頬に軽く口付けをした後、満面の笑顔を浮かべながらシヤアと共に店を後にした。この話はこれで終わりだが、最後の好意のお礼に、二人はこの後ホテルで一晩中激しく愛を確かめ合ったという事にして締めたいと思う。

最後にだが、私からも言っておきたい事がある。こちらの方こそ今までありがとうね。ずっと作品を創ってきて本当に楽しかったよ！これからもずっと好きで居続けるからね。私の……はまあんちゃん！

* 完 *